

児童発達支援事業所におけるウェブ会議システムを使った小グループ活動

日本行動分析学会新型コロナウイルス関連特設ページ 原稿

竹島浩司, Ph.D., BCBA-D 株式会社エルチェ

2020年11月11日

【背景】株式会社エルチェでは、名古屋にある児童発達支援事業所において、子ども数2から5名までの小グループの活動を提供している。新型コロナウイルス感染予防のために、来所による療育を一時的に断念せざるを得ない保護者が増加し、2020年4月より小グループ活動にウェブ会議システムを使って参加する選択肢を提供した。参加は保護者が要望する場合に限ったが、今後感染または自宅隔離者に該当するなどの可能性も踏まえ、積極的にシステムを整え、保護者にも説明していった。

【対象】小グループはもともと保護者参加型で運営されており、対象は発達に遅れのある就学前の子ども（多くは自閉スペクトラム症）とその保護者である。活動中に子どもの保護者は、子どもの適切な行動をプロンプトし強化する役割を担う。また保護者は教室でのターゲット行動や家庭での練習方法の説明を受け、その他生活上の相談や他の保護者との情報交換も可能である。

【活動内容】オンラインでの小グループ活動の内容は、一般に園などで行われるような自由遊び、絵本の読み聞かせ、ダンス、手遊び、工作、ゲーム等で、セラピストが主導して活動を実施した。

- 活動はオンライン上でも参加できるものを用意する。例えば自由遊びの時間は、積木積みと崩し、シール貼り、絵描き歌など、他の子どもと内容やタイミングを合わせられる遊びや、しりとり、戦いごっこ、かくれんぼ、物集めなどのゲームなどである。
- 毎月事前に活動内容、準備物、ターゲットをリストにして（添付例「[6月課題シート](#)」）保護者に配布し、保護者が家庭で準備をスムーズにできるように、またターゲットを繰り返し練習できるように工夫した。

【機器の工夫】機器にはコンピューターやタブレットを使用する家庭が多く、スマートフォンを使って参加する家庭も1割弱あった。家庭での機器の使用は基本的に保護者に任せられるが、必要に応じて電話やメールでやり方の支援などを行った。またセラピストは、子どもができる限り小グループでの活動に集中できるように以下のような工夫をした。

- 子どもの発言が多く聞きとりづらい時など、セラピストがコミュニケーションを取りやすくするために「ミュート機能」や「イヤフォン・マイク」を使用した。これらは、保護者からのフィードバックが改善のきっかけとなった。
- セラピストのコンピューター画面に表示した絵や写真を、子どものコンピューター画面

(タブレット画面)でも見やすいように、「画面共有」機能を使用した。

【保護者の役割】保護者は、必要に応じて(通信環境によって音声の聞き取れない部分やリーダーの質問に1回目で反応しない時など)指示や質問を繰り返したり、セラピストが画面上で子どもの適切な行動を観察できない時にも保護者が代わりに褒めたりするなど、子どもが継続して授業に参加するために重要な役割を担う。来所での小グループではサポート役としてプロンプターが存在し、必要に応じて保護者のお手伝いをすることができる。しかしオンラインでは保護者がプロンプターの役割全てを担う必要があり、保護者の負担を考慮して、以下のような工夫もされた。

- 「保護者が無理をしない」：オンライン活動は基本的に子どもの自由参加である。無理に参加させる事で子どもと保護者の負担にならないよう配慮した。画面から離れる際は子どもから(または保護者のプロンプトで)休憩を要求できるようにした。
- 「無理のない事前準備と般化」：オンラインでの参加者が増えた時期には、毎週末には次週行う活動について動画(動画の例をご希望の方には提供できます¹)を保護者に提供し、子どもと保護者が動画で授業を一度体験して(準備性を整えて)から小グループ活動に参加できるように設定した。また特にダンス、ゲーム、工作など、子どもが拒否しないものから、遊びの一環として保護者が一緒に繰り返し行うように勧めた。

【評価とデータ】子どもそれぞれに個別目標が設定されている。オンラインの活動中にはセラピストの他にデータを取る係も用意し、グループ活動を観察して子どもの成長に関連するデータを取った。データ取得の手間をできる限り減らすために、ターゲット行動は基本的に低頻度の行動とした。また個別目標の記録用シート(添付例「データ記入説明」)が用意されているが、他にも、活動中に起こった子どもの行動を自由記述式に記録するタイプのデータも使用し、いずれかの方法で子どもの進歩状態が確認できるようにした。

【保護者支援】感染リスクへの懸念から外出できないなど多くの悩みを抱える保護者に対して、活動の最後にスーパーバイザーと個別に相談できる時間を別途設定した。

- 相談内容は、小グループ活動中の保護者の支援の仕方に対するフィードバックやアドバイス、家庭での療育についての相談が主である。
- その他にも、オンラインに必要な機器使用の問題から、健康管理のチェック、家庭で過ごす時の活動のアイデア、子どもの進歩状況の確認など相談内容は多岐にわたった。

【参加者の反応】一時的にはあるが、在籍中の子どもの9割以上がウェブ会議システムを使って小グループ活動に参加体験をした時期もあった(家庭からオンラインで参加するこ

¹ 要望者は himawariaba@elche.co.jp までご連絡ください。今回は日本行動分析学会会員に限定させていただきます。

とへの抵抗感が強い方など、ウェブ会議システムの利用に至らない保護者が1割弱いた)。体験をした子どもの中には、ウェブ会議システムを使ったグループ活動にはまったく興味を示さずに、今後の参加は困難であると判断せざるを得ない子どもが1割弱いた。体験を通して以下のようなメリット・デメリットが見られた。

- ウェブ会議システムを使うメリット：「ビデオ・モデリング」の効果もあってか、模倣の目標は継続して成長する子どもが多く、聞き手・受容言語のスキルや質問に答えたりするスキルも予定通りの目標達成をする子どもが多い。また家庭内と比べて人前では発言数が減る傾向のある子どもが、発言の頻度が増えることもあった。保護者から「予想よりも集中して参加できている」との声は多く、「逆に来所での療育よりも集中して参加している」と言った報告も中にはあった。咳が出るが元気な場合や、兄弟に風邪症状がある場合など、遠隔で参加がしやすくなる利点もある。
- ウェブ会議システムを使うデメリット・改善すべき点：目標によっては、子ども同士の社交や他児への要求など、どうしても機会が作りづらい目標がある。子どもの反応が観察しづらい難点もある。比較的発達年齢の低い子どもの中に、活動への参加・集中が全般に難しい子どもが存在した。ウェブ会議システムの使用を最初から回避される保護者も存在することから、メリットやデメリットなど、保護者に対する事前の丁寧な説明が大切であると感じている。機器上の難しさとして、ネット環境が不安定になったり、突発的な機器の不具合が生じたりする場面があり、改善が難しい。またセラピストの継続的スキル向上とサポートも大切である。グループ内で来所の子どもとウェブ会議システム使用の子どもが混ざる場合は特に、セラピストが子ども一人一人の発言を聞き取れない場面や、来所する子どもが要求する遊びにオンラインの子どもの参加が難しい場合など、困難な場面の対処法について支援が欠かせない。画面上では子どもの行動の全てを確認できないからか、「1回1回の教えた達成感が得られにくい」との報告をしたセラピストもあり、その理由の分析なども今後の改善のヒントになるであろう。

【まとめ】新型コロナウイルスの感染予防と療育(子どものスキル獲得)の継続という重要な2つの目標を両立させるために、保護者への選択肢の1つとしてウェブ会議システムを使った小グループ活動への遠隔参加を開始した。子どものスキル獲得は概ね良好であったが、必ずしも全員に当てはまることではなく、困難な時期の保護者支援の重要性と、その難しさについても痛感する結果となった。また多様なニーズに順応するセラピストの支援の重要性についても確認された。この経験から継続してABAサービスを改善させる重要なヒントもあると考えられ、このような報告の機会や議論を重ねる事が大切であると考えられる。